

6/5(土) まいど/倫理号です。人間は自然に逆らう輩出転、むしろ受け入れたい  
自然は自然に任せては!

孝せ運心アホ一鳥

2021. 6. 5~6. 11

今週の

倫理

6月のテーマ | 天候気候を受け入れる

1232号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

ある朝のことであつた。  
すばらしい雪煙りを見た。

くつきりと晴れわたつた富士の、八合目あたりから頂きにかけて、いちめん白い幕のようにたちのぼっている……雲のよう……雪煙りである。

はじめは雲かと思つていたが、稜線の雲から、粉をふきあげるように空にたちのぼると、きらびやかに輝いているのを見きわりの強風のために、上へ吹きあげられていくものとわかつた。

大自然は、どうしてこのようなすばらしい芸術をつくりだすのであろうか。それは、どのようなすぐれた芸術家が腕をふるつても、太刀うちできないほど美しく、かつ雄大な作品と思われた。

人は大自然のなかから素材をえらびだし、あるいは絵を描き、写真をとり、詩歌によりみあげるなど、いろいろな作品をつくることのできる。なかには、すばらしくみごとなものが出てきて、人を感嘆させる。たしかに人のつくつたものにも、すぐれたものは多い。また俗に「絵のようにすばらしい景色である」などといわれて、自然の美しさよりも、人の描いた絵のほうがまさっているかのようないかたをしているよう



## 自然と人間

丸山竹秋

なばあいもある。

しかし、どのようなすぐれた天才であつても、大自然のつくつた美しさ以上のものを人は作りえないのではあるまいか。事実、いかにすぐれた絵画、彫刻、詩歌などをみても、大自然そのものの美しさには、もう一歩というところで（じつははるかに）及ばないのが実状である。

大自然にはかなわない——。  
宇宙は偉大である。その果ては一刻一刻と膨張してひろがりながらも、また反対に原子のような小さな世界を、ますます微に入り、細にわたつて、のぞかせてくれる。

自然は征服できない。それは人間の力のおよぶところではないのだ。

原子力の開発や宇宙船の飛翔を誇示しても、それはせいぜい、自然の力のほんのおずかを利用してもらつたにすぎないのだ。大自然の力のすばらしさを、正直に認め、驚嘆し、頭を下げる。

そこに人間活動の敬虔な出発がある。  
宗教も芸術も、大自然にごうまんであることは許されない。ごうまんな態度では、人類の救済は不可能であり、真の美も創作されにくいであろう。

倫理も、人と人とのあいだを結びつけるまえに、大自然のはかりしれない力にたいする自覚をはっきりさせることを忘れてはなるまい。大自然にたいして威ばる者は、人に対しても、わがままをふるまう。それは倫理以前の生き方だ。

『よるこんで生きる』より)

夕べの振りに一頁、六月度「夜響へんりの心もころもがえ